

お名号を聞くとは

ご議題

(Ref『一念多念文意』全書 P2-604-5、註 P678)

「もんごみょうごう聞其名号」といふは、本願の名号をきくとのたまへるなり。きくといふは、本願をききて疑ふころなきを「聞」といふなり。また、きくといふは、信心をあらわす御のりなり。

一、はじめに

ご議題は、第十八願成就文について、親鸞聖人が直接注釈を施して下さる御文であります(Ref「一念多念証文(または文意)」)。

浄土真宗の根本義がこのご文の中に凝縮されている大切なご文であります。御文は、三つの文よりなっています。仮にこれを今、第一文、第二文及び第三文と呼ばせて戴くことに致しましょう。

第一文と第二文には「何をきくのか」(聞の対象)が示されてあります。

第一文には、「本願の名号」が、第二文には、「本願」がきく対象であると示されてあるのであります。これを拝読するうちに、次のような疑問が頭をもちあげて参りました。

一体、「名号(本願)」を聞くとは、その謂れ(ロジック)を聞くことで足りるのであるか。「名号(本願)」の謂れを聞き受ければ、直ちに現に働いて下さるお名号(本願力)に遇わせて戴くことになるのであるか。

お名号が具体的に働いて下さるお姿が「本願招喚の勅命」ですから、「謂われ」さうかがわせて戴ければ、ただちに「勅命」を聞き受けたことになるのであるか、という疑問でありました。

二、お名号のおいわれ

お名号は、ご本願が成就され、衆生救済のために本願力が働いて下さ

るお姿ですから、ご本願を「因」とするとお名号は、「果徳」です。

それ故、お名号は、実は本願力そのものだと言えるかと存じます。

そこで、お名号のおいわれをきくことは、ご本願について、その「生起」、即ち、何故にご本願を建てられたのか、次にその本末、建てられたご本願の結末はどうなっているかを聞くことに他ありません。

そこで、ご開山聖人は、信文類で「然るに経に聞といふは、衆生仏願の生起本末をききて疑心あることなし、これを聞といふ也。Ref「信文類(末)」と明らかにして下さることであります。(Ref「信文類」全 2-72、註釈版 P251)。

ここでは詳細は略しますが「仏願の生起」とは、自らは迷いの世界を抜け出すことのできない煩惱成就の私という存在があったからであります。また「仏願の本末」とは、苦悩の私を捨てないという如来の作願があり、大悲心は既に成就され、今や、私の上にお名号となって働いて下さることであります。

以上が、名号(本願)のおいわれのあらましです。いわば、名号が働いて下さるに至った道行き(ロジック)を示しています。では、ロジックがわかればそれでよしと言えるのでしょうか。

三、名号を聞くとは、そのお謂れをお聞かせに与れば十分か?

この問は、お名号の謂れについての情報が獲得できることと、私がお名号の働きによって、呼び覚まされ揺り動かされることとが同一か否かという設問に置き換えることができます。

言葉で生きる人間が、言葉の持つ意味をコミュニケーションで得られた成果物である情報を得たことで事が足りるのかどうかという風に捉え直すことができます。

ここはどうしても、言葉は何のためにあるのか。言葉の原点はどこに

あるのか、言葉は何のためにあるかというところから掘り起こしてみなくてはなりません。

そうすると、この設問は、言葉の持つ原点を問い直す大変大事な課題になるのではありますまいか。

皆さんは、言葉の原点をどのようにお考えになるでしょうか。自らが今生に生を得た歴史を振り返ってみましょう。

呱呱の声をあげて誕生した私に対して、父親・母親のどちらがイニシアチブを取るか否かは別として(実はわが子の名を決めるときが最初の大きな夫婦喧嘩だったという笑えないお話もあることでしょう。)両親は全身全霊を傾けてわが名を案出してくれたのでありますまいか。

ここからは、わが子が誕生した頃を思い起こして戴ければどなた様も首肯して戴けるでありますまいか。

命名したわが子に対して親はやさしく懸命に「ちゃん」と呼び続けたのではなかったでしょうか。

それがいつの頃だったかは、もう忘れましたが、やがて、一月・二月と経過するうちに、ついにその時がきて、わが子は自分が親に呼ばれていると気付いて反応を示してくれることであります。

わが子の名を呼び続けて初めて反応を示してくれたとき、親は大きな喜びを覚えたのではありますまいか。

このことから、言葉は、わが子を呼び覚ます呼び声として真っ先に用いられたのではなかったでしょうか。少なくとも、自らの今生の歴史をひもとけば言葉の原点はそうに説き明かせるのではありますまいか。

呼び声の持つ効果について、今ひとつ、私にはつい何年か前に次のような思い出があります。

あるとき、ある伝統のご法座があってあるお寺に出向いたときのこと

です。そのお寺の老坊守様から「ちゃん」といきなり呼ばれました。

私はハットしました。びっくりしました。その瞬間、私は小学六年生に戻っていたのでした。

そのお寺の老坊守様は、当時小学校に勤務していらっしゃった先生だったのです。

言葉の原点は、相手呼び覚まし揺り動かすことにあったことにご賛同戴けるのではなかったでしょうか。

「先生がどのような人であってこうであって」と長々とした説明を聞くよりも何よりも「ちゃん」と「呼び声」で迫られる程、先生と私とが直結できるものはありますまいか。

同様に、阿弥陀如来という親様とはどうであってこうであって縷々説明してわかるものではなく、如来様が本願招喚の勅命として仕上げた下さったお呼び声で直結できるのではありますまいか。

南無阿弥陀仏は、人間のこしらえたものではありません。

如来様のふるさと、真実の世界から届けられた御呼び声であります。

「ワレヲタノメ」のお呼び声を案じ出され、呼び声で以て私に迫られ、ついにその時が来て、私が如来様の御呼び声だと気付いて反応したとき、如来様はどれ程お慶びになったことでありましょう。

そうすると、答えは明かであります。名号(本願)のいわれを聞くだけでは足りず、名号が働いて下さる勅命を直接聞き受けるのでなくてはならないことであります。合掌

正覚寺平成二十一年度報恩講 十月二十四日(土)～二十五日(日)
正覚寺仏教壮年会例会 毎月第一日曜午後八時より
正覚寺仏教婦人会例会 毎月十六日午後七時より
著作編集兼発行元 リビンぐらいぶず編集室(浄土真宗本願寺派 正覚寺内)
〒520-0501 大津市北小松四五番地 ☎&Fax077-596-0166 住職 堅田 玄宿
<http://syohgakuji.web.fc2.com/> E-Mail:mhkatata@pluto.dti.ne.jp